シュティフターの『森の泉』の das wilde Mädchen

鈴　木　　善　平

Das wilde Mädchen in Stifters "Waldbrunnen"

SUZUKI Zenpei

das wilde Mädchen という言葉を手掛りとして，『森の泉』の主題の側面を考える．この物語の中のある箇所から以後，das wilde Mädchen の wild という語が用いられなくなる．我々は，その少女が wild であることをやめ，sanft へと変って行ったことを知る．シュティフターは，『森の泉』に於ても，「おだやかな法則」の支配を願っているのである．

I　森　の　泉

パッサウに住む老シュテファン・ハイルクーンは，毎年夏になると，2人の孫フランツとカタリーナと一しょに出かけて，ヤンデルスブルンの彼方の森の傍の村に滞在する．そこは，遠くから眺めると，青い空の下，「すべてのものが，おだやかな靄の中で静まっている．」Alles ist still in dem sanften Duſte.(1)

その森に泉がある．「この泉へは，一筋の小径が通っている．羊飼や木こりやそのほかの人々が，その水は神聖で健康にする力を持っていると信じ，そこへ行って飲水を汲んで来るからである．」(2)

老シュテファンもまた，失った健康と喜びを得るために，2人の孫と一しょにその泉を訪れる．「喜びと健康を両方共失った者は，その水を飲み，その空気を呼吸して，喜びと健康を再び手に入れる．だから私は，お前たちと，私が森の中で知っている泉に行き，その泉のまわりを流れている空気の中へ行くのだよ．」とシュテファンは，孫たちに聞かせる．(3)

老シュテファンは，妻に死なれ，息子夫婦にも若くして先立たれ，勤めていた役所では上役にとやかく指図を受け，「喜びと健康を失った」のである．

3人は，この村で，ユリアーナという少女を知る．ユリアーナは，村の学校の教師から，教室での態度などによって，粗野で乱暴で手に負えない少女「das wilde Mädchen」と見なされている．(4)

II　das wilde Mädchen と das Mädchen

das wilde Mädchen という言葉は，ユリアーナの，いわゆる換称代名詞として用いられている．ユリアーナの換称代名詞としては，このほか，das Mädchen を始め幾つかあるが，今これを，wild の有無に従って分類すれば次の通りである．（数字は使用回数を示す）

1．wild を有するもの

das wilde Mädchen	36
das wilde Kind	1

2．wild の無いもの

das Mädchen	34
das kleine Mädchen	1
das Kind	11
dieses Kind	2
ihr Kind	1

ところで，『森の泉』は，ここに使用するテキスト(5)に於ては，第291頁から第335頁にわたる物語であるが，その中で，das wilde Mädchen の物語，即ち，嘗ての日々のユリアーナの物語は，第305頁から始まる．

今ここに，それぞれの換称代名詞の，第305頁以後の各頁に於ける使用回数を表にして示せば，次のようになる．

この表では，das widle Kind も，wildを有するゆえ，das wilde Mädchen の欄に入れて数え，一方，das kleine Mädchenやdas Kind 等，wild の無いものはすべて das Mädchen の欄に入れて数えてある．

尚，ユリアーナの使用されている回数も，あわせて記す．但し，第317頁から第319頁までは，Jana という形で用いられているが，これもユリアーナとして数えてある．

表

頁	das wilde Mädchen	das Mädchen	Juliana
305	0	1	0
306	1	5	0
307	0	0	0
308	3	0	0
309	6	1	0
310	1	4	0
311	3	0	0
312	1	3	0
313	0	1	0
314	2	2	0
315	0	0	0
316	0	0	0
317	3	1	3
318	2	2	2
319	3	2	1
320	2	4	2
321	0	3	1
322	0	3	2
323	2	0	1
324	4	3	0
325	2	4	2
326	1	0	2
327	0	0	5
328	0	0	0
329	0	2	9
330	0	6	3
331	0	1	5
332	0	0	3
333	0	0	5
334	0	1	7
335	1	0	3

Ⅲ wild

Ⅱに於て，das wilde Mädchen と das Mädchen について見て来たが，ここであらためて，『森の泉』に於ける wild の用例について見て行くことにしたい．その用例は次の通りである．

1. Gehölz の付加語として，das wilde Gehölz 等[6]
2. Winter の付加語として，der wilde Winter[7]
3. Sonst geht es aus Bosheit in die Schule, um da wild zu sein und zu trotzen.[8]
4. Kind の付加語として，das wilde Kind[9]
5. Mädchen の付加語として，das wilde Mädchen 等[10]

グリムのドイツ語辞典の，wild の項の分類に従えば，上記の 1. は，wild がその原義に於いて，植物に関して用いられている場合である．

von pflanzen 'nicht absichtlich gepflanzt und angebaut, nicht künstlich veredelt, in ursprünglichen zustand freiwachsend'

2. は，wild が，その転義である *'stark, heftig, ungestüm'* の意味に於て天候に関して用いられている場合である．

von naturerscheinungen, besonders von wetter

3.，4.及び5.は，人間について用いられている場合である．

まず，wild が，その原義に於て，人間について用いられるときは，次の通りに記されている．

von menschen 'im naturzustand lebend, uncultiviert', meist mit dem nebensinn des vnvernünftigen, rohen, gefährlichen.

また，wild の転義の一つ，*'unbändig'* の意味に於ては，特に子供と少女について用いられるとして，

'unerzogen, ungezogen, ausgelassen, ungebunden, feurig', zunächst von kindern und jungen mädchen.

と記されている．

『森の泉』のユリアーナが，das wilde Mädchen と称されるときの wild も，この，人間について，また子供と少女について用いられる場合の wild と同じ意味で用いられているものである．このことは，村の小学校の教師が，老シュテファンに向かってユリアーナのことを述べる言葉で明らかである．

"Und könnt Ihr die Kinder dieser Leute nicht verbessern und veredeln?" fragte Stephan.

"Ja, wenn die Eltern nicht wieder alles verdürben", sagte der Lehrer, "die Kinder lernen Halsstarrigkeit und Bosheit. Da habe ich sogar ein Mädchen in der Schule, das aus Rohheit und Bosheit, obwohl es meiner Lehre schon fast entwächst, bisher noch kein Wort in der Schule gesprochen hat."[11]

教師は更に言葉を続けて，この少女は，教師が質問したりやさしく話しかけても，歯をむき不快な目で見るだけで，何も言わないし，習字帳や本や計算帳を見せるように言っても，手で隠して，いやな目つきで教師を見る．その上，路地ではほかの子供たちを突いたり叩いたりする，と言う．

粗野で乱暴な (*roh*)，始末におえない (*unbändig*)，しつけのなっていない (*unerzogen*) 少女ユリアーナ，

まさしくこれは「wild」な少女である.

Ⅳ das wilde Mädchen から das Mädchenへ. そして「sanft」なユリアーナへ.

先に挙げた表によれば，第327頁から第334頁までは，それまで頻繁に用いられていた das wilde Mädchen が用いられておらず，wild のない das Mädchen のみが用いられていることがわかる.

das wilde Mädchen は，第326頁の第1行目に用いられてから以後用いられなくなり，第335頁に至って，もう一度そして最後の， das wilde Mädchen が用いられる.

So war es mit dem wilden Mädchen.

これは，嘗ての日々の「wild」なユリアーナについての物語の，いわば結びの言葉である.

嘗ての日々のユリアーナについて語る物語が， das wilde Mädchen について語る物語であるとするならば，その物語の終りに至る部分で，das wilde Mädchen という言葉が用いられず，das Mädchen という言葉だけが用いられているということ，即ち， wild という言葉が用いられなくなっているということは，注意してよいことであろうと思う.

第326頁第3行目以降の，wild という言葉が用いられなくなり始める部分は，次のようにして始まる.

ある日，シュテファンの2人の孫フランツとカタリーナがユリアーナと一しょに部屋にいたとき，フランツが，牧場の向こうの川へ行こうと提案する．フランツとカタリーナが祖父に挨拶して戸口から出て行ったとき，ユリアーナは，もう一度引返して来て，「シュテファンに駈け寄り，手でシュテファンの上衣の袖に軽く触れ，それからそこを手でおして，彼を見つめ，そしてそれから2人の子供たちのあとを追って駈けて行った.」シュテファンは，涙をこぼし，室内に掛けてある十字架の前へ行って言う.

「聖なる正しき神よ．私が，私自身のゆえに人から愛されるということは，私の生涯でこれが始めてです．私はその人に，感謝されたり好意を示されたりしなければならない事や，その人が親切のお返しに望んでいる事を何も与えておらず，何していません．私を愛してくれるこの人は，貧しい，ひとりぼっちの，粗末に扱われた子供です．そしてこの子供は，自分の行為と感情の原因を知ってはいません．正しき善なる神よ，私は，私の生涯の終りに臨んで与えられた，これまで知らなかった，この甘美な心持をあなたに感謝いたします.」

今や，ユリアーナは，老シュテファンにとって，もう wild ではない．こうして，das wilde Mädchen から wild という言葉が取り除かれる.

「私が，私自身のゆえに人から愛されるということ」(…, daβ ich von jemandem um meiner selbst willen geliebt werde,)，これと同じ意味の言葉を，何年かののち，シュテファンは，フランツの手をユリアーナの手の中に置きながら，再び語るのである．「ユリアーナは，ただ私が私であるからということだけで，私を愛している.」と.

"Franz, du erhältst eine Gattin, welche wirklich liebt und auch ihre Pflicht versteht, und das ist das Höchste. Halte dieses Höchste in Ehren, und du wirst glücklich sein und glücklich machen. Du liebst mich und Katharina liebt mich aus Verwandtschaftstrieben und weil ich bin, der ich bin; Juliana liebt mich allein, weil ich bin, der ich bin, und diesen Schimmer der Liebe hat mir Gott gesendet, und ich will ihn mir für den Rest meines Lebens bewahren, es mag dieser Rest lang oder kurz sein."

So war es mit dem wilden Mädchen.(12)

嘗て，シュテファンは，亡き妻のことを2人の孫に語って聞かせている中で，次のように言っている.

aber sie konnte nie tun, was gegen ihren Sinn und ihr Gemüt war, sie wuβte es nicht und kränkte mich.(13)

シュテファンの妻は，自分の心や気持に逆らうことは決してすることが出来なかった．そして知らずして，シュテファンの心を傷つけていたのである.

これに対して，ユリアーナは，「自分の心や気持に逆らうことは決してすることが出来ない」人間ではなくて，意志で行動する人間であることを，シュテファンは知っている．そして彼は，常にユリアーナの意志を尊重して来た.

Wenn das Mädchen herübergeht, soll es freiwillig gehen.(14)

"Juliana, Mädchen", sagte er, "tue, wie du willst."(15)

"Ich sage wieder wie einst", antwortete stephan, "Juliana, tue, wie du willst."(16)

更に，フランツも，ユリアーナの自由な意志を尊重する.

"Ich meine", antwortete Franz, "daβ man das Mädchen nicht zwingen soll."(17)

ユリアーナは，自分の心や気持によってではなく，シュテファンがシュテファンであるがゆえに，シュテファンを愛している．しかも自由なる意志によって，シュテファンを愛している．かくて，シュテファンは，失った喜びを再び取り戻す．

「愛のこのほのかな光を，私に神は与えて下さった．そして私はこのほのかな光を，私のために，私の生涯の残りものとしてとっておこうと思う．たとえこの余生が長くあろうとも，短かくあろうとも．」(18)

まことに，ユリアーナの愛は，老シュテファンの余生をほのかに包む光，すべてのものがその中で静かに憩うおだやかな靄である．(Alles ist stll in dem sanften Duft.(19))

のちに，シュティフターは，リーギ山で，フランツとユリアーナ夫妻を見ている．そのときのユリアーナについて，シュティフターは『森の泉』の最初の部分で次のように記している．

> Sanft baute sich die Gestalt empor,
> wenn sie sich regte, so war die Bewegung
> weich und geltend.(20)

その姿は，おだやかに (sanft) 立ち，彼女が動くと，その動作は，やわらかで，作法にかなうものであった．

「wild」な少女から「sanft」なユリアーナへ，ここに，私は『森の泉』の主題の側面を見る．

V 結び

1859年，シュティフターは，養女ユリアーナを入水によって失った．それより先，1853年，シュティフターは，『石さまざま』を出版して，その序文に於て「おだやかな法則」を讃え，「おだやかな法則」の支配する世界を願い求めた．その中の一篇「白雲母」の「小麦色の少女」が去って再び帰らなかった如く，養女ユリアーナは，シュティフター夫妻のもとを去って永久に帰らない．

1866年，シュティフターは，『森の泉』をあらわす．その主人公は，養女ユリアーナと同じ名前のユリアーナである．養女ユリアーナの幸福を願い，その死後もその幸福を願い続けるシュティフターは，『森の泉』に於て，ユリアーナに幸福な生活を実現してやる．

「おだやかな (sanft)法則」のもとに於ける幸福を．

〔註〕

使用テキスト
Adalbert Stifter Gesammelte Werke,
herausgegeben von Konrad Steffen,
Birkhäuser Verlag Basel und Stuttgart 1964
の第5巻を用いる．

(1) 298頁
(2) 307頁
(3) 300頁
(4) 305頁
(5) 上記シュティフター全集第5巻
(6) 310，312，313，321，323の各頁
(7) 315，332の各頁
(8) 306頁
(9) 306頁
(10) 308頁他
(11) 305頁
(12) 334～335頁
(13) 302頁
(14) 321頁
(15) 330頁
(16) 334頁
(17) 321頁
(18) 335頁
(19) 298頁
(20) 294頁